

令和 7 年度 岡山県備中保健所運営協議会 議事概要

- ・開催日時・場所 令和 7 年 10 月 30 日（木）14:30～15:55 備中保健所第 1～3 会議室
- ・出席委員 17 名

-----要 旨-----

■会長、副会長選任

会長に、総社市長 片岡 聡一 委員、
副会長に、倉敷市連合医師会長 荒木 一博 委員と浅口医師会長 福嶋 啓祐 委員を選任

■会長あいさつ

昨今の少子化対策をどう捉えていくのかが、非常に大切だ。子どもは多い方が良い、人口は多い方が良い、人口が減少するのは悪しきことだと、そこに執着しすぎて、近隣同士で子どもを奪い合うものではないと思っている。この圏域で支え合い、チームワーク良く論じ合っていくことを基本姿勢として、協力していきたい。

■事務局説明

資料に基づき説明

■質疑応答・協議

（委員）

敷地内全面禁煙実施施設認定制度について、良い取組だが、健康増進法で各市町村（庁舎）は、100%敷地内禁煙を求められている。管内の達成状況のデータはあるか？。令和 4、5 年の国のデータでは、60%が敷地内禁煙を達成しており、未達成の自治体は、かなり焦らなくてはならない状況だ。

（事務局）

官公庁というような区分で示されており、個別には示されていないのではないか。

（委員）

里庄町では、法に基づき、敷地内全面禁煙を実施していた。一方で、自治体は、たばこ税を財源にしており、喫煙者への配慮についても国から通知されている。敷地外の道路での喫煙が生じることを改めるためにも、今は敷地内の一角に来庁者や職員の喫煙所を設けている。

（委員）

自治体として、前向きに取り組みたい。

（委員）

ファッションで、タトゥーを入れる者が多いと思うが、生活衛生関係施設の監視指導上はどうか？。この行為は、ウイルス性の肝炎の発生に関係すると思う。

（事務局）

法令の規制対象ではなく、保健所の業務としては所管していない。以前、県として、自粛を働きかけて、入れ墨を業とする者はいなくなったという経緯がある。

(委員)

災害対応について、備中地域の調整本部は、県本庁とも連携を図るだろうが、他県とも連携した調整本部のマネジメント体制に関して、DHEAT 活動の研修受講状況はどうか？。

(事務局)

県として、全県の DHEAT 統括人材研修や基礎研修に積極的に職員を派遣しており、また、県内でも研修を継続的に行うことにしている。直接、保健所が研修を実施するまでではないが、県全体でしっかり進めている。災害時に、それぞれの段階、部署で、互いの動きを理解して、的確に取り組みたい。

(委員)

精神障害者にも対応する地域包括ケアシステム（いわゆる“にも包括”）の構築について、今後、市町がメインで包括ケアを担っていく中で、保健所は、市町をどのようにサポートしているのか？。

(事務局)

井笠支所に関して言うと、市町の体制整備と個別支援を進めている。特に、個別支援は、管内 5 市町に対し、それぞれ地区担当者を配置し、市町の保健師と一緒に困難事例などのケースに対応している。また、精神障害者を取り巻く様々な課題について、ケア会議などを通じて、関係者を繋ぎ、皆が連携して、地域でどう支えていくかを話し合っている。加えて、入院患者に対しては、管内の関係病院と協力して、市町の保健師、福祉担当者と共に病院に出向き、退院後の支援等に向けた交流会を開催するなどの支援をしている。

(委員)

“にも包括”について、これから市町の保健師に対応がシフトする中、保健所と市町で一緒に体制を構築してもらいたい。

(委員)

市長として、様々な報告に接する中、特に辛いのは、自死の報告だ。市長として、地元医師会と相談して、心療内科、精神科に繋いでいくネットワークづくりを進めているが、診察する側が少なく、受診の予約も診察が 1 ヶ月後になるような状況がある。やはり、生き辛さを感じている人をどう救うかは大きなテーマだ。保健所をはじめ関係者の連携をお願いしたい。

(委員)

令和 7 年版自殺対策白書によると、自殺者数は、全国では統計開始以来 2 番目に少ない数だったが、15 歳から 29 歳、特に中高大学生の自殺が高止まり、ないしは微増だ。これに対して、倉敷市でも重要な課題だと考えており、ゲートキーパーの活動など周囲がサポートする体制を強化していく必要があると認識している。生きることに関難を抱える方やこの会議に参加の皆さんと一緒に取り組んでいきたい。

(委員)

資料の婚姻、離婚件数を見ても、孤独化やストレス社会が進んでいると感じた。薬局の関係では、現在、オーバードーズが取り上げられている。これが絡んで、自死に至る状況はどうか？。

(事務局)

自殺対策は非常に重い課題だ。その背景には、数値で現れている以上の幅広い事柄がある

と考えている。

いわゆるソーシャルキャピタルという、地域の人々からの声掛けの多い地域では、自死を考えることが少ないという結果も出ており、地域での人と人との繋がりが、自殺対策の基本になると考えている。

オーバードーズと自死の関係の情報は、持ち合わせていないが、オーバードーズ防止の啓発の前に、それをする気持ちにならないような社会をつくっていくのが大切で、いかに、若い人も大人も、人との繋がりをつくっていくのか、先程のゲートキーパーの取組等を一般の方にも知ってもらい、適切に声掛けができる社会をつくっていくことが重要だ。

特に我々保健医療福祉関係者が、声掛けや、適切に支援機関に繋いでいくことが大事であることを認識し、これを広く知らせていく必要がある。

私は、人を大切にする、人から大切にされていると感じる方は、おそらく、自死を選ばないと考えている。保健医療福祉関係者は、何が大切かを意識して、苦しみを抱えている人たちをサポートしていかなくてはならない。

質疑応答・協議 以上